



ツジ等の低木林へと変化していき、山頂付近では、オオバコのような草本類へと変わった。また、8合目付近からは、大山特有のキャラボク林が現われ、たいへん新鮮なものに感じた。登山道は、かなり急勾配であったが、全員頂上までたどり着くことができた。頂上で昼食を済ませ、一息ついて下り始めた。下山途中でも、登りの調査と一致するかどうか、高度を測った。そして、1合目と2合目の間で、ブナ、ミズナラ林の中に入り、適当な場所を選び、10m四方で囲み、植生を調べた。その後、宿舎に戻り1日の調査が終わった。その日のミーティングでは、録音テープにより、その日正午の天気図を作成したが、これは、その日測定した気温、湿度との関係を調べるためのものであった。また、植生についてまとめ、事前に調べたことと照らし合わせたところ、それに類似していることが確認できた。

翌日の8日は、主に大山の地形について調査した。まず、宿舎の前の切り開かれた地層の断面について説明していただいた。普段何気無く見過ごしてしまう地層も注意して見ると、大山の成り立ちと深い関係を持っていることが解かった。それから、車に乗り大山を様々な角度から調査した。そうしてみると、大山が、かなり崩壊して来ているということが解った。特に二の沢、元谷における延々と連なる瓦礫の様子は、すさまじいものである。不思議なことに、この崩壊は、大山の南北斜面にのみ起こっているとのことである。その他、ブナ林、偏形樹観察、年輪採集を行なった。この日は、天候が悪く、傘をさしての調査であった。ミーティングでは、大山の南北

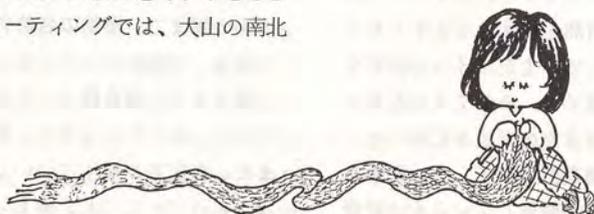
斜面崩壊の原因について話し合い、ユニークな意見が出たが、最終的な答は出ず、レポートの課題となった。この晩は、ミーティングを早めに切り上げ、食堂において、コンパを行なった。普段、直に話し合う機会がない先生方とあれこれと話が出来、とても有意義なコンパであった。

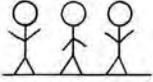
9日は、いよいよ最終日。この日は、まず、皆生温泉に移動し、弓が浜半島の成り立ちと現在の状況について説明を受けた。その後、昼前には、現地解散となり全日程を終わった。この野外調査の課題として、レポートを提出することになった。

今、この研修を終えてみて、机上の勉強だけでは得られない成果を上げることが出来、本当に参加してよかったと思っている。実際に自然に触れることが、たいへん大切であると感じた。また、研修によって、コース内の仲間、そして先生方との親睦を深められたことも収穫の1つであった。敢えて注文を付けるならば、日程が短かかったのではないかということである。最初書いたように、この研修の目的は、自然を総合的に捕えようとするものである。だから、植生、地形、気象と、多くのことをやらねばならない。先生方も、まだまだ話し足りないといった様子であった。こういったやり方は、総科の大きな特徴で、すばらしいことだと思う。これからますます内容が、充実して行くことを期待したい。



54年度生 環境科学 大内章義  
神坂伸一





# 3人寄れば同好会

## □ 紹介しよう私のサークル

### 環境不安研究会

バーンシュタインは、彼の第2シンフォニーを「The Age of Anxiety」と名づけた。カミュやオーデンの思索と観念の中にあつた不安は、まさしく今、我々の現実の生活の中にその巨大な翳をおとしている。情報Ⅲ群では、今を生きる我々の実感の中に鼓動し、認知や行動に絶えず影響を与えつつけている「現代の翳の秘密」を解き明したいと思っている。「環境不安研究会」が発足してから未だ1年にならない。しかし熱心な教官・学生の参加によって着々とその成果があがりつつあるのは嬉しい。不安を実証的に研究するという一点を共有し、しかも、生理心理学的アプローチ、社会心理学的アプローチ、臨床心理学的アプローチといったように、多角的な接近を相互に報告・討論しあえるのも本研究会の強みである。



代表 生和秀敏

### カスパーズ

— カスパ・ハウザーならぬ、カスとパー —

街頭でのインタビュー

- インタビュアー 「カスパーズってご存知ですか？」  
 男 「知りません？」  
 インタビュアー 「カスパーズを知っていますか？」  
 女 「いいえ？」  
 インタビュアー 「カスパーズというものを聞いたことがありますか」

男女

「まったく！」

\*\*\*カスパーズとは、皆さんの知らぬ所で日夜、野球を通じて、心の交流をはかっているグループです。\*\*\*

(協力：合同産業)

総合科学部の学生なら、皆、知って……え？知らない？くわしく知りたい？じゃあ教えてやろう。チームのオーナーは、情報Ⅲ群の黒川正流大助教授大先生です。え？知らない？まあ、そうかもしれませんね。監督は、生和大助教授……知らないでしょうね。メンバーは、教官連では、藤原先生、海老原先生、杉本先生、(なぜかⅡ群の)宗岡先生など、遊び好きな先生たちが、研究の合間を見つけては、学生と野球(球遊びともいう)に興じられています(もっとも遊びの合間に研究をしておられる先生もいらっしゃいますけども)。学生では、遊びに忙しい院生2名(匿名希望)と、勉強に滅法忙しい我ら学部生約10名と、かわいい(?)チアガール数名と、スタイル抜群のマネージャー1名がいます。

負けても滅げないこの根性、負けても忘れない打ち上げ会、文字通り、「カス」と「パー」の集まりなのです。実力二の次、もちろん年齢制限もなし。要は楽しさ。それが「カスパーズ」です。

尚、情報Ⅲ群研究室にて、「愛はカスパーズを救う」愛のチャリティ募金箱を設置しておりますので、何とぞご協力を!!

代表 黒川正流

### 社会文化関係

#### 法社会学研究会

昭和47年7月6日設立で8年目。「現実に学ぶ」をモットーに民主主義的精神を身につけることを目標に「法律相談部会」「原爆問題研究部会」「実践的判例研究部会」「理論法部会」の4分科会と「法律学校」および「模擬裁判」の実行委員会をもつ。

顧問の村上武則(法)、伊藤護也(総)、富井利宏(総)の各先生を中心にゼミ等をやっているが、参加者は、法学部学生が主で総合科学部生は若干。不定期会合。

代表 村上武則

## 婦人論研究会

一昨年から、毎週水曜日夕方、ゼミナールを開講。女性史・婦人問題関係の文献を、担当者を毎回きめて報告、討論をする形式ですすめている。参加者は、どちらかと言えば教育学部生が多い。チューターとして、木本(喜)先生が助言、世話にあたっている。

代表 木本喜美子

## 資本論研究会

設立は、今年3月で、まだできたばかりともいえる。しかし、ゼミは毎月第3水曜日の夜、定期的に開催されている。内容は、文字通り、『資本論』の論読会。チューターとして中(学教)、仁連(総)先生の他に、経済関係の先生が、その都度参加していただき、レポーターをきめ、そのレポートを中心にした討論を行なっている。参加者は、院生と学生にまたがっている。

代表 仁連孝昭

## 科学論研究会

昨年春開設で、1年半経過。今年夏まで毎月第1、第4水曜日夜、会合をやったが、今は第2水曜日のみ。テキストとして、岩崎允胤・宮原将平『科学的認識の理論』をもちいているが、ときには話題になった本も取り上げる。科学論のうちでもテキストのせいで、科学的認識に関する部門が中心。自然系と文科系の考え方の違い等がよく議論になる。舟橋、木本(忠)の両先生が協力、参加者は院生が多い。

代表 木本忠昭

## 国際情勢を考える会

今年7月から開催。各週土曜日の午後、主に「世界」、「朝日ジャーナル」、「エコノミスト」、「世界週報」等を用いながら、その時々の特ピックスを討論している。チューターとしては、特定の教

官にはお願いしていない。参加者は10名前後であるが、約半分が多学部学生。今後は、トピックスに偏せず、理論的考察を追求していきたい考え。

代表 木本忠昭

## S F 研に花束を

### — 広大 S F 研究会の起源と発生と発展 —

前略を重ねて、ようやく八甲田山にピアニシモ。夜なべして協力してくれたのは、三月十日の2年前、忘れもしないイヨマンテの夜が実にS Fなのだ。ああ思い出の1979年2月1日。産声をあげた鼻緒は切れた。

それは4人ではじまったのに、午後からは9人、山ぞいで30人、ところによってアレフゼロは、完成した。どうせ人目をばばかる、路地裏の少年ならば、せめて夢ぐらいいかなえてやりたいものと、大講義室の隣の控室に、エントロピーは増大し、額ぶちにはまったのは、電信柱の夢だった。驚いた同人誌は、月に1回と思いきや、なんと恥しらずにも、2ヶ月に1回、あろうことか、4ヶ月に1回たあ、ますます大山空手がまったけの味を恋ふる道理ではある。

恥を投げうった時、人は神となるのなら、もはやS Fは、悲しみの大学祭でビール券を獲得した時、山は死にますか？

S F大会を広島でとの大宇宙の摂理にめざめた時、シャボン玉は、忘れっぽい舟乗りと一緒に、天高くのぼっていった。そのあとを追いかけて、我々はどこへ行くのだろうか。 おわり。

53年度生 地域文化 新井正記

## 統計学ゼミナール I

### 数理統計学・ゼミナール

#### — 現象の確率的把握 —

#### (1) Introduction

数理統計学という学問は、現在、日本のどこの大学にも統計学科が置かれていない現状で、そのための(日本における)研究及び教育の組織はかなり貧弱です。たまたま、総合科学部には、情報行動科学コースがあり、その中で数理統計学(or統計学)が専攻できるシステムになっています。そして、現在、総合科学部では数理統計学専攻の学生は、4年生に6人います。

(文章の中で、数理統計学と統計学という言葉が混

じって出て来ますが、同じ言葉として受けとっていただきたい。) )

## (2) 統計学の学問の性格

統計学というと、処理のわずらわしさや、数式が入り込んでくることが手伝ってか、一般に難しく、**それゆえ入りにくいイメージ**があるようですが、しかし、これ程用途も広く、また、**理論的にも興味深く**(私的な考えですが)、しかも、**幅広い学問**もないと思います。

実際、用途(応用)の面から言えば、自然科学にとどまらず、今では、**社会科学・人文科学の研究手段**としても使われ、流行と言っても良い程です。また、逆に言えば、**実験や調査のデータがあくまで“偶然”**というやっかいで確率的な代物をしょいこんでいる限り、**統計学の世話にならないと、何も物事が言えなくなるのです。**

その上、(自然界に限らず)世の中の現象を、理論的に研究しようという場合でも、それら現象の中に**確定しない、確率的な要素**を含んでいる限り、解析的(または**確定的**)はMODEL より統計的(または**確率的**)なMODEL が使われなくては行けないと思われまます。

たとえば、これを読んでいる皆様も、自分の専門の書物でも論文でもよいですから、**進歩的**だとか**数理的**だとか言われるものなら、(理論・実証を問わず)読んでいただくと、多くは何らかの形で統計学の世話になっているでしょう。

## (3) 当ゼミの紹介

実は、本題に入らずに、このまま統計学のPRで終始してしまいたいのですが、それではおしかりを受けますので、当ゼミの内容の話に入ります。

内容は、簡単に言えば、

数理統計学(Mathematical Statistics)のBeginnerのための勉強会で、具体的には、Math, Stat でも最もPopularと言われる入門書“Introduction to Mathematical Statistics” By Hogg & Craigをゼミナール形式で読んでいます。

この本は、数理統計学を専攻しようと思うものなら、知っていなければならぬ最小限の内容を網羅し、しかも(アメリカの本らしく、冗長だが)、**わかりやすく書いてあるので、完全にマスターしておく必要のある本**と言えます。

現在参加しているのは、情報行動科学コースの数理系の3年生5名と、Advisorとして(数理系)数理

統計学専攻の4年生4名で、4年生は交代で出席しています。ゼミの目的が、3年生の教育にあるので、初歩的なものを読んでいます、この本ももうすぐ終わるので、次に、数理統計学の各論(たとえば、多変量解析、時系列解析、実験計画法など)のものを読んでゆく予定です。ただし、参加している3年生の専攻の志望が決定していないので(11/9現在)、あまり強いて勉強させられないのが悩みで、専攻が統計学になれば、**時間・量・質とも厚く**して行きたいと思っています。

## 統計学ゼミナールⅡ

### 統計的方法・データ解析ゼミナール

— やさしい統計学への招待 —

#### (1) Introduction

前に書いてある、数理統計学ゼミナールの紹介のときの内容といっしょであるので大まかに書きますが、

\*\*\*数量統計学ゼミナールは、将来、統計学を専攻しようと思う者、または**関連の研究**をしようと思う者、現在統計学を専攻している者を対象に開いているのに対し、

\*\*\*こちらの、統計的方法・データ解析・ゼミナールはあくまで、他の分野(たとえば、生物学・心理学・経済学など)を研究しようという人のために、統計的な方法を習得してもらい、正確に使ってもらおう、というものです。

#### (2) 内容

Iの方でも書きましたが、統計的方法は自然科学だけでなく、社会科学・人文科学の分野で研究法として広く取り入れられています。しかし、その手法を**実際使っている側は、何故、何の為に使っているかを理解して**いることが多く見うけられ、また手法自体も専門外の人達には難解です。したがって、

このゼミでは

① 統計的手法の筋道をわかりやすく教え、理解してもらおう。

② 実際にデータを扱い手法に慣れる。

ことを目的としています。

具体的には、

ステップ1 (1次元データの解析)

(統計の基本的考え方(標本と母集団、推定と検定)  
実験・調査の計画と分析(実験計画法、標本調査法の概略紹介)

↓  
実際のデータ処理

ステップ2 (多変量解析法)

(回帰分析、主成分分析(or因子分析)、判別分析、数量化理論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳなど

手法の手順の説明とデータの解析

というメニューで行います。

このPaperを書いているのが11/9でまだ開かれていないのですが、『飛翔』にのった時点では、昨年、一度開いた経験から言えば、約7名ぐらいの参加者で進行していると思います。

昨年、これと同じものを開いた時は、ステップⅠの段階の実際のデータ処理の前までを、週2時間、12週ぐらいで終わっています。今回は、ステップⅠ・ステップⅡを並行させてゆく予定で、計15週ぐらいで完結させて、参加者の方にはある程度、自分で考えてデータを処理できる力をつけてもらうよう考えています。

51年度生 情報行動科学コース

数理統計学・多変量解析専攻 佐藤 敦

### この愛すべき軟弱クラブへ

皆様どうか救いの御手を……

— Sokka Tennis Dohkohkai —



1979年(S54)の暮、'80年の足音を間近にしなから、テニス同好会創設の話しが持ち上った。一体、どこの**好き者**が口に出したのか知らないが、迷惑な話。大勢で動くことが、あまり好きではない者同志が、一種の団体のようなものを作りたいというのだから。

翌年の1月、いよいよ「喫茶アメリカ」にて創設の運びとなりまして、情報の藤原先生まで呼んで、コーヒーで乾杯。さて練習という時に、後期試験が始まりまして、例の通りの個々の球打ち。こんな連中が、4月に合宿をしたというのだから、たまったものじゃない。初日に大宴会、目がすわって強盗のようになる者やら、ホモになるものやら、揚句の果てには鉄腕アトムが飛び出して、踊りまくって、ベットに

倒れ込むしまつ。当然の結果として、翌日は二日酔い。コートにゴザを持ち込んで神戸大学軟庭部の練習を尻目に、ゴロ寝する者続出。どこでどう間違ったのか？神のみぞ知る、か。

新入生を勧誘しようとした誰が言ったのやら。“**軟弱クラブ**”と銘打ったのが、そもその誤り。酒好き、女好き、さぼり好き、クラブ持ち、研究会持ち、バイト持ち、子持ちの1年生が入って来た。おまけに、こっちは我流テニス、巧い指導なんぞ出来るわけがない。**非難ゴーゴー、人数少々。**

しかし、何とか練習を続けて、今に至っています。練習は週に2回、月・金PM6:00～中央コートにて。会費月500円。(今までは朝練習をしていたのですが、人が出て来ないし、朝は寒いし、それよりも何よりも、広大軟庭部の〇〇に耐え切れなくなってやめました。)

おい1年、2年生、練習に出て来い。

もっと巧くなれ。個人で練習をしろ!!

53年度生 地域文化 安居 宏

### 広島大学比較文化研究会

本会の主たる目的は、様々な文化的事象に関する比較研究を行なうことによって、会員相互の学術的な連帯と向上を目指すことを、その旨としている。しかし本会も、4年前に発足した当初は、比較文化研究講座の教官・学生からなる、親睦会を兼ねた小さな集まりであった。しかも、「総合科学部」という新しい学部における、「比較文化研究」という新しい分野、そうした状況の中での本会の発足は、確かにそれ自体が、新たな試みであったと言えるだろう。当然のことながら、多くの困難を伴ったことは言うまでもない。しかしこれまで、会員の積極的な参加と努力とによって、月に一度の研究會開催をはじめ、合宿、会報「比較文化研究」の発刊と、着実な成果を挙げてゆくことができた。現在では、より学術的性格を強めてゆくことを本会の方針とし、既に会員も、卒業生や本会の主旨への賛同者も含め、ほぼ60名を数えるまでに到っている。

本会の主たる活動は、会員の研究発表の場である、年に一度の大会を中心として、例会及び合宿の開催、そして会報の発刊等である。また各会の前には予め勉強会を開き、各自が積極的に参加できるよう努めている。テーマも哲学・芸術学・文学・言語学と様々な領域にわたり、非常に自由な研究会となってい